

全国大学書道学会 令和元年度（鳥取）大会 開催要項（第2次案内）

下記の要領で、全国大学書道学会 令和元年度（鳥取）大会を開催します。ふるってご参加いただきたく、ご案内申し上げます。

- 1) 主 催 全国大学書道学会
- 2) 開催大学 鳥取大学
- 3) 開催日 令和元年9月28日（土）
- 4) 大会会場 鳥取大学地域学部・広報センター（〒680-8551 鳥取県鳥取市湖山町南4丁目101）
- 5) 参加費 3,000円 *準会員（大学院生）は2,000円

6) 日 程

●9:00 受 付（地域学部5160講義室前）

●9:30～10:20 開会式・総会（会場 5160講義室）

1. 開会のことば 鈴木 晴彦（日本大学）
2. 開催大学あいさつ 鳥取大学 住川 英明 先生
3. 会長あいさつ 平形 精一（静岡大学名誉教授）
4. 理事長あいさつ 横田 恭三（跡見学園女子大学）
* 議長選出 [] ()
5. 議事
1) 平成30年度事業報告 →資料1（当日配付） 杉山 勇人（鎌倉女子大学）
2) 平成30年度決算報告 →資料2（当日配付） 永由 徳夫（群馬大学）
3) 平成30年度監査報告 [] ()
4) 役員改選について→資料3（当日配付） 横田 恭三（跡見学園女子大学）
5) 令和元年度事業計画（案）→資料4（当日配付） 杉山 勇人（鎌倉女子大学）
6) 令和元年度予算（案）→資料5（当日配付） 永由 徳夫（群馬大学）
7) 『書の古典と理論』改訂版について 鈴木 晴彦（日本大学）
8) その他
6. その他
1) 学会誌・会報の発行について 角田 勝久（新潟大学）
小川 博章（淑徳大学）
2) 新入会員紹介→資料6（当日配布）
3) 次年度開催大学あいさつ [] ()
4) その他 事務局
7. 閉会のことば 柿木原 くみ（相模女子大学名誉教授）

●10:30～12:10 研究発表 午前の部 会場 5160講義室

10:30～11:00 研究発表①

司会：柿木原 くみ（相模女子大学名誉教授）

日比野五鳳の書風の変遷—放ち書きに注目して—

新潟大学大学院現代社会文化研究科博士前期課程・一年 佐藤 有紗

11:05~11:35 研究発表② 司会：角田 勝久（新潟大学）
元朝の避諱に関する一考察—趙孟頫を例に—

保善高等学校非常勤講師 早川桂央

11:40~12:10 研究発表③ 司会：永由 徳夫（群馬大学）
犬養木堂の中国書画碑帖鑑定について

相模女子大学専任講師 下田 章平

●12:10~13:10 昼食休憩（60分）

●13:10~14:15 研究発表／午後の部 会場 5160 講義室

13:10~13:40 研究発表④ 司会：鈴木 晴彦（日本大学）
狩谷椽斎の金石文研究に関する再検討 —『古京遺文』目録中の記述を中心に—

東京学芸大学准教授 橋本 栄一

13:45~14:15 研究発表⑤ 司会：小川 博章（淑徳大学）
篆書墓誌蓋銘の揮毫者について —北魏の同筆墓誌蓋銘に注目して—

愛媛大学教授 東 賢司

●14:15 ~ 14:25 休憩（10分）

●14:25 ~ 15:45 大会記念講演 会場 5160 講義室

演題：書と絵画の接近と決別—1950年代の前衛書をめぐって—

—1950年代に書と抽象絵画は急速に接近し、次々に画期的な表現が成立した。それは日本のみならず、世界的にも注目される事件であった。書と絵画は互いにどのような可能性を見出したのか。日本の前衛書家、日本と欧米の抽象画家の作品をたどりながら、その短い交流の歴史を検討する。

講師：尾崎 信一郎 先生

—おさき・しんいちろう 鳥取県立博物館副館長、1962年鳥取市生まれ。大阪大学文学部西洋美術史学博士課程満期退学。兵庫県立近代美術館、国立国際美術館、京都国立近代美術館に勤務し、2006年より現職。著書に「絵画論を超えて」（1999年 東信堂）、「東アジアにおける書の美学の伝統と変容」（共著 2015年 三元社）

●15:50 閉 会

7) 学会誌への投稿

・大会での研究発表を経て学会誌『大学書道研究』へ投稿される方は、完成原稿（3部作成）を11月10日（日）までに編集局長宛に送付願います。

・大会における研究発表を経ずに、学会誌に研究論文を投稿される場合は、学会誌掲載の執筆要項を確認の上、論文要旨（内容・体裁は第1次案内記載）を9月10日（火）までに事務局長宛に送付いただき、完成原稿（3部）は11月10日（日）までに編集局長宛に送付願います。

（編集局）〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050 新潟大学教育学部

全国大学書道学会編集局長 角田 勝久 宛 （025-269-9250）

8) 会員書作展

会員書作展を以下のように開催いたします。ふるってご参観下さい。

会 期 9月27日（金）～9月29日（日）9:00～17:00（27日は12:00～）

会 場 鳥取大学広報センター スペースF

9) 理事会

下記の通り理事会を行います。常任理事、理事（各局担当・地区担当）、監事の皆様はご出席願います。

日時 9月27日（金） 18:30～20:30

会場 観水庭こぜにや（鳥取市永楽温泉町651/0857-23-3311）

*常任理事、理事、監事の皆様には出欠席の確認と併せ、別途ご案内いたします。

10) 懇親会

三学会合同の懇親会を開催いたします。ふるってご参加下さい。

日時 9月28日（土） 17:00～19:00

場所 鳥取大学生協 第1食堂

会費 会員 4,500円 準会員（大学院生）3,000円

11) 交通、宿泊、昼食等について

交通：鳥取駅からのアクセス JR利用・・・鳥取駅から山陰本線 鳥取大学前駅下車 徒歩3分

バス利用（日の丸バス）・・・鳥取駅バスターミナル(5)番のりばで乗車

鳥大線「大学前」下車すぐ。湖岸線・鹿野線「鳥商前」下車 徒歩5分

タクシー利用・・・鳥取駅から約15分 鳥取空港から約5分

宿泊：各自ご手配願います。大学の周囲にはホテル等はありません。鳥取駅周辺には温泉旅館やビジネスホテルがあります。

昼食：9月27日（金）・28日（土）のみ、大学内の食堂・ショップ等が開いています。また、大学周辺にコンビニがあります。

12) 参加申込方法

①同封の参加票（黄色）にお名前とご所属を記入してご持参いただき、参加費とともに当日受付に提出して下さい。引き替えに、資料入り封筒と領収書をお渡しいたします。

②同封の名札用カードに、ご所属とお名前を事前にご記入の上、当日お持ち下さい。受付で名札用ホルダーをお渡しいたします。名札用ホルダーは、終了後に受付にお戻し下さい。

13) 台風等・緊急時における対応について

台風等、緊急災害時は、開催校との協議により大会を中止することがあります。その場合は、開催日前日の19:00までに全国大学書道学会ホームページ（<http://all-shodo.jp>）の全国大学書道学会公式ツイッター（https://twitter.com/all_shodo）にてお知らせいたします。ご確認をお願いします。

[お問合せ] ・研究発表、学会に関するお問い合わせ

学会事務局（杉山勇人/鎌倉女子大学/sgym-hyt@kamakura-u.ac.jp/0467-33-8211）

・大会に関するお問い合わせ

開催大学担当（住川英明/鳥取大学地域学部/sumikawa@tottori-u.ac.jp/0857-31-5082）

本学会と併せて、下記の学会等が開催されます。（ただし、参加費は別扱いです。）

*9月27日（金） 13:00～ 日本教育大学協会（教大協）全国書道教育部門会役員会

14:00～ 日本教育大学協会（教大協）全国書道教育部門会

16:30～ 全国大学書写書道教育学会理事会

18:30～ 全国大学書道学会理事会

*9月28日（土） 9:00～ 全国大学書道学会

17:30～ 三学会合同懇親会

*9月29日（日） 9:00～ 全国大学書写書道教育学会

*9月27日（金）～9月29日（日） 全国大学書道学会会員書作展

鳥取大学（鳥取キャンパス） アクセス



〔鳥取キャンパス〕

鳥取駅からのアクセス

○JR 利用

鳥取駅から山陰本線 鳥取大学前駅下車
徒歩 3分

○バス利用（日の丸バス）

鳥取駅バスターミナル(5)番のりばで乗車
鳥大線「大学前」下車すぐ
湖岸線、鹿野線「鳥商前」下車 徒歩5分

○タクシー利用

鳥取駅から約15分

鳥取空港からのアクセス

○タクシーで 約5分

○徒歩で 約20分



令和元年度 全国大学書道学会(鳥取)大会

研究発表要旨集

令和元年九月二十八日(土)

鳥取大学地域学部

研究発表① 10:30 ～ 11:00

日比野五鳳の書風の変遷―放ち書きに注目して―

新潟大学大学院現代社会文化研究科博士前期課程一年 佐藤 有紗

日比野五鳳(以下、五鳳とする)は、明治三十四年に愛知県に生まれ、大垣中学校に入学後、大野百鍊から指導を受ける。貫名崧翁の和様漢字や王羲之の書を中心に指導を受けながら、独学で仮名を始めた。師が亡くなると、最終的に仮名を専攻し、平安古筆と現代的な表現との調和によって生み出される新しい作風を確立した。

今回筆者が五鳳の作品について検討するにあたり、『神戸町日比野五鳳記念美術館収蔵作品集』(二〇一四年)をはじめとする、いくつかの資料から合計二八八点の作品を集め整理した。これらの作品を制作年代ごとに並べて通覧すると、晩年に「放ち書き」(二字一字離して書く書き方)で書かれた作品が散見される。さらに、この二八八点の中で、七十一歳の時に連綿部分が一箇所も無い作が現れるという現象があることが分かった。これまでも、五鳳の放ち書きについて触れた文献はあるが、詳細な検討はされていないように思う。

そこで本研究では、この放ち書きに着目し、五鳳の書風の変遷について検討したい。また、五鳳と同時代に活躍した仮名書家である安東聖空(一八九三―一九八三)と比較することにより、お互いの差異を際立たせた上で、特徴を指摘していく。

研究発表② 11:05 ～ 11:35

元朝の避諱に関する一考察 ―趙孟頫を例に―

保善高等学校非常勤講師 早川 桂央

陳垣『避諱举例』、向熹『漢語避諱研究』、王建『避諱辞典』等の先行研究により避諱研究は着実に前進した。今後は現存する避諱例を精査し、当時の筆記文化や避諱に付随する諸制度に言及していく事が重要となる。

元朝期に於いて、避諱の風習は廃れ、総じて行われなくなったと解するのが歴代避諱学者の認識である。しかし、趙孟頫「禊帖源流」、「常清静経」には、彼の祖父趙希永の永字を避けた闕筆が確認できる。この闕筆については先述の先行研究に記載は無いが、安岐、洗玉清、陳建志らが既に言及している。しかし、三氏の言及は趙孟頫作品の概説、真偽の弁別、諸本の流伝、書法の変遷に焦点を当てた論考中に為されたものであり、従って当時の避諱規定を参照し闕筆に言及したものは無い。

本発表では、元朝期の避諱規定を『元史』、『元典章』より確認し、主に「禊帖源流」を参照して元朝避諱についての考察を試みる。考察の結果、趙孟頫は偏諱の規定は守っており、また『元典章』で回避すべきと定められている特定の文字は自由に使用していることが確認できた。しかし趙孟頫の書いた永字の全てに闕筆が見られる訳ではなく、むしろ闕筆が見られる作は上述の二例に限られる。残念ながら、これが如何なる道理によるものか判断することは叶わず、この点は今後の課題としたい。

ひとまず本発表では、貴重な元朝避諱の実例を挙げ、元朝避諱についての基礎研究を試みたい。

犬養木堂の中国書画碑帖鑑定について

相模女子大学専任講師 下田 章平

本発表は日中近現代書画碑帖収蔵史の研究の一環として行うものである。発表者は明治維新から現在までを暫定的に五期に区分し、本発表では、ボストン美術館の中国コレクションや日本の関西を中心とする中国書画碑帖コレクションといった大コレクションが形成され、関西中国収蔵史上の劃期をなす第二期（辛亥革命から第二次世界大戦終了時）に活動した犬養木堂（毅、一八五五—一九三二）の収蔵活動について検討する。

木堂は政治家としてつとに著名であるが、書画碑帖及び刀剣の収蔵家・賞鑑家としても名高い。『木堂翰墨談』（博文堂合資会社、一九一六）刊行以後、木堂の賞鑑家としての声価は高まり、来日した中国人収蔵家はまず木堂の鑑定を受けるのが常となっていたようである。このように、木堂は日本に流入する中国書画碑帖の情報いち早く得て、多くの場合博文堂を介して収蔵家に斡旋したり、賞鑑家に鑑定を依頼したりして、「犬養木堂を中心とする収蔵集団」を形成し、実質的にその統括をずる立場にあつたと見られる（『日本中国学会報』七一〔二〇一九〕所収拙稿による）。

本発表では、主に鷲尾義直『犬養木堂書簡集』（人文閣、一九四〇）、『新編犬養木堂書簡集』（岡山県郷土文化財団、一九九二）を分析の対象とし、木堂の賞鑑家としての活動を検討したい。このことにより、「犬養木堂を中心とする収蔵集団」の収蔵観（書法観）の一端が明らかになるとが期待される。

狩谷掖斎の金石文研究に関する再検討

— 『古京遺文』目録中の記述を中心に —

東京学芸大学准教授 橋本 栄一

狩谷掖斎（一七七五—一八三五）は、江戸時代後期を代表する国学、漢学兼備の考証学者である。特に日本古代の金石文について精緻な考証を行った『古京遺文』は、その価値を減ずることなく、現在においても金石文研究の礎となっている。掖斎の研究方法の特質は、書物商である実家の高橋家のネットワークとそこから得た知見、養子先の津軽藩御用をつとめた津軽屋の経済力を背景にして、その室号でもある「実事求是」を旨に、関西方面への度重なるフィールドワークを行ったことである。

実物と文献を車の両輪の如く自在に操作して行う研究は明解であり、時に判断がつかない場合には、穿鑿することなく保留する態度も見られる。しかし、現行の『古京遺文』の目録の末尾にある「元明天皇御陵碑」、「奈保山狗装隼人像」、「東大寺盧舍那仏蓮華須弥山図」、「栄山寺武智麻呂公墓表殘石」、「金剛輪寺永手公墓表」、「叡福寺馬腦石記文」、「田道碑」、「鬼室福信碑」の八件の本文不載となった金石文に関しては、実見している可能性が高いはずであるのに実物とは異なった認識となっていたり、明らかに誤った伝聞を確認することなくそのまま記録していたりと、通常の掖斎の研究姿勢とはやや違和感の有るものとなっていることは否めない。

本発表では、これらの金石資料をあらためて見直し、『古京遺文』の諸写本、版本の校勘からその編纂過程を追っていき、掖斎の記述の意図を読み解く。それらを総合して掖斎の金石文研究に関しての再検討を行いたい。

篆書墓誌蓋銘の揮毫者について

—北魏の同筆墓誌蓋銘に注目して—

愛媛大学教授 東 賢司

平成三十年度の臨時発表会において、北朝から隋代への墓誌蓋の変化について発表した。この中で、大きな流れとしては、墓誌蓋の文字は北魏から北齊へ、更に隋への技法的な伝達が行われていた可能性が高いということを指摘した。

それを踏まえ、本年度は篆書の文字に注目し、墓誌銘の一字一文字の比較を行っている。一言で篆書と言っても、北朝の墓誌銘には種々あり、その起源を探ることは容易ではない。作業としては、いわゆる小篆系の文字で書かれる書体について確認をしている。

篆書で書かれる墓誌蓋銘の優位性はその数量にある。北朝の石刻資料の内、いわゆる地上碑の碑額に篆書で書かれるものは約百三十字であるのに対し、墓誌蓋銘では約一千四百文字にもなり、十倍の差がある。また、秦代の小篆、あるいは後漢代以来の伝統的な篆書を受け継ぐ文字も墓誌蓋銘の方が多いと思われる。

また、分析作業の中で、数点であるが、共通する筆跡と思われる資料が抽出できた。今までも夫婦の墓誌蓋銘に書風の類似性があることは指摘されてきたが、他者間での共通性は新たな発見である。これらと同葬された墓誌銘の書風を合わせて比較すると、墓誌作製の工程の可能性が見えてくる。本論では、北魏を中心とする石刻資料の中で、碑文と墓誌の篆書で書かれる文字を抽出し、特に共通点のある墓誌蓋について考察したい。